

「リツ子その愛・その死」の死生観

長野, 秀樹
九州大学大学院 (修士課程)

<https://doi.org/10.15017/12025>

出版情報 : 語文研究. 56, pp.21-28, 1983-12-10. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「リツ子その愛・その死」の死生観

長 野 秀 樹

(一)

檀一雄の文学的出発は、他のいわゆる無頼派作家と同様に、一九三〇年代に求めることができる。昭和八年に発表した「此家の性格」(「新人」十一月創刊号)が、それである。「新人」は創刊号のみで廃刊となるが、「鶴」、「青い花」を経て、昭和十年に「日本浪漫派」に太宰治等と参加する。参加後、昭和十年に「日本浪漫派」に発表した「夕張胡亭塾景観」(十二月号)が第二回芥川賞候補作となり、また昭和十二年に処女短篇集「花筐」(七月、赤塚書房)を上梓し、昭和十四年には第一詩集「虚空象嵌」(十二月、赤塚書房)を刊行する。しかし、一般に檀一雄の名が、知られるようになるのは戦後のいわゆる「リツ子もの」、後に「リツ子・その愛」「リツ子・その死」(昭和二十五年四月、作品社)に纏められる作品によってであろう。

この作品は、それまで私小説をほとんど執筆していない檀が、妻律子の死を最大のモチーフとして、執筆した作品であり、後年「火

宅の人」(昭和五十年十一月新潮社)と共に、私小説作家としての檀一雄を印象づけた作品でもある。

「リツ子その愛・その死」を檀が執筆するきっかけとなったのが、昭和二十三年四月の妻律子の死であることは間違いない。彼が最初に書き起こした章が、リツ子の臨終場面を描いた「終りの火」(「人間」昭和二十三年二月号)であることから、それは窺える。しかし、この作品が妻律子への鎮魂歌としてのみ、成立していると考えるのは早計に過ぎるであろう。

およそ妻の病氣と死を扱ったいわゆる「病妻物語」∨「亡妻物語」∨が鎮魂としての側面を持ちつつ、自らがその死を乗り越え、生きんが為に書かれるというのは、論を俟たないであろう。大江健三郎は「原爆体験記」(昭和四十年七月、広島市原爆体験記刊行会編)の後書きの中で次のように述べている。

過去の苛酷な体験を、現在と未来において価値あるものの領域にくみ入れることができたとき、はじめて、われわれは、自分のあじわった不幸をみずからつくなうことができたと感じ、立ちなおし、自己回復する方途を見出すのではありますまいか。

大江のいうように、人間が、過去の不幸を「価値あるものの領域にくみ入れること」により「自己回復」が、なされるのならば、妻律子の死も、檀一雄にとつての「価値あるものの領域にくみ入れ」られようとしたであろう。そして、檀もまた、「リツ子その愛・その死」を執筆した当時を回想したエッセーの中で、「作品というものが、自分自身の恢弘、乃至は自分自身の鼓舞激励に向うとするならば、なるべく豊饒に向つて誘導されなければならないと信ずる」と述べている。^(註1)

では、妻の死を「価値あるものの領域にくみ入れ」ようとする檀にとつて、その「領域」とは、むしろ逆の「領域」、つまり△死△とはいかなるものであったのだろうか。

彼は「リツ子その愛・その死」に先立つエッセーの中で次のように述べている。^(註2)

さて三十三年の間用心深く死者の表情を見ることを避けてきた私が、これはまたこの二年の間（中国戦線従軍の間―引用者注）おそらく数百を越える死の諸相を目のあたりした。

△中略▽

この事件をきっかけとして、爾来、私はむしろ死者の間をほんろうされつづけてきたようなものである。最後に妻が私の腕の中で死んでいった。

この二年の間に行会うた死は、祖父や祖母の黄昏がすべりよるような死とは全く反対のものであった。生への妄執と嘆願と祈禱の声を尻目に、死の巨大なハンマーが、丁度金槌で甲虫を押しつぶすように、うちおろされた。

妻律子の死は、こうした中国での「数百を越える死」の果ての新た

な死だったのである。彼が△死△に対して、最初に直面せざるを得なかったのは、中国戦線においてであり、そこで彼の△死△に対する思想が形作られていったのではないだろうか。まず、それを明らかにすることから出発して、後のリツ子の死までをたどってゆきたい。

(二)

「檀さん、洛陽に行きませんか」

「行きましょう」

「すぐにですよ」

唐突とも思われるこのような書出しで、作品は始まる。檀は報道班員として、リツ子と生まれて間もない太郎を残して、中国大陸へ旅出つたのである。作品のなかで、「あなたはほどの適任者はほかにない」と編集者が言うのは、檀は昭和十一年、十六、十七年と二度にわたつて満洲を放浪し、一度はヤプロニーで蜜蜂を飼う決心をしたこともあるといった事情をさすものと思われる。

ここで、彼が報道班員として従軍した当時の中国戦線の状況を知するために、檀が同じ中国戦線に題材をとつた作品「照る陽の庭」^(註3)（「文芸」昭和二十四年一月号）の解説から引用する。

在華アメリカ空軍はこの頃（昭和十八年末―引用者注）広西省の桂林、柳州、湖南省の衡陽、江西省の遂州を基地として、保有機数約一六〇機、この年十一月二十五日には台湾新竹付近に渡洋来襲している。これに対して、大本営では中国戦線の保持のために、大規模な在華米軍基地占領作戦（一号作戦）を企

画。一九四四年四月十七日、作戦開始、第一段階の京漢作戦、第二段階の湘桂作戦を通じて、十一月十日右に挙げた全基地の占領によって作戦を終了した。

しかし、米空軍はその後、装備の増強と長距離爆撃機B二一九の配置によって、制空権をさらに強化し、その航空機数も七五〇に対し、日本の在華空軍、第五航空軍は一五〇機という量、質ともに劣悪な状態であった。

このような「劣悪な状態」の下で、檀の報道班員としての活動は続けられたわけである。

ここで、彼は先に述べた「数百を超える死」を目撃するわけであるが、それらは「運命を信じながらバタバタと死んでゆく」中国人と、「颯爽と、飛んで、墜ちて」ゆく日本の飛行兵たちである。さらに具体的にいえば、それらは「自分は戦争が嫌いだから、止戈という名をつけている。止戈は戦いを止めるのだ」という劉止戈であり、炭焼竈の側で、「殺すという意味も知らず、自発的な意思もおそらく持た」ぬ兵士に目隠しもせぬまま、銃殺される老兵であり、独秀峯の下で、こと切れている人品卑しからぬ中国人である。

そして、「墜ちて」ゆく飛行兵は、太宰の「女生徒」を読んでいた土屋大尉であり、「弾丸が真中に近寄ってきたましてね」と豪快に笑った羽沢准尉であり、その他の将校たちである。これらの死に対して檀は次のように述べる。

私は何も、死を讃えはしない。しかし、いちいちの迷える小羊達の面貌が、一瞬にして、決定し、とりとめもなく逸脱した生の誘導と幻惑から、正しい自然への連繫に帰ってゆくのを見るのは却って私自身の生命のあり場を匡す頼りのように思われ

た。

あれ程臆病であった私が、死を見ることを一概に怖れなくなっていた。正しい生の誘導の緒口でも見つけられるように、好奇に死の諸相を追っていた。

この時、檀にとって他者の死は、「正しい自然への連繫に帰ってゆく」ことであり、「正しい生の誘導の緒口」にしか過ぎなかった。「好奇に死の諸相を追っていた」という反省の語を伴いながらも、彼は常に「生者の側」に立っているものであり、死は彼にとって、反面教師の役割しか果していない。そこにあるのは彼自身のエゴイズムであった。

さらに続けて、自分自身の死については、次のように述べている。死をおそれなかったわけではない。が、自分の道というか、自分のいのちというか、そんなものを見つめて歩きつめながら、さて、バタリと戦野の果の中に屍をさらしても何もわめく程のことはない。

檀にとって重要なのは、「自分のいのち」を「見つめて歩」くことであり、その中で死ならば、「何もわめく程のことはない」ものにかたずき、死は「バタリと戦野の果の中に屍をさら」すことではない。ここには現実の死に伴うであろう苦痛への思いや、恐怖感はあるとはいってよいであろう。こうした死への現実感の不足の原因は、彼が直接戦闘に参加する必要のない報道班員であったということにもよるであろうが、より本質的には、彼の自分の体力に対する異常な過信によるものと思われる。彼は青年期を回想しつつ、「私の無頼に加わってくる友人は次々と倒れ傷ついていったが、私だけは決して中心から、はずれなかった。バタバタと脱

落してゆく友人達を見て、まったく不思議な気持ちにとらえられた」と述べているが、このような健康に対する過信は死への現実感を希薄化してしまっている。つまり、檀は死を生を根底にすえることにより、生きていく術を得ようとしつつも、その死そのものに何ら自らの問題としての意味を見出し得ていないと言いえよう。檀は先に引用したエッセイの他の箇所で、「この死の正確な現実の相を以て、生の側の着実な再建を試みなければならぬ」と述べているが、この時点において「死の正確な現実の相」は何ら内在化されていない。

このように、檀は死を自らの問題として内在化しえないまま、中国戦線から帰国する。そして、帰国後、彼を待ち受けていたものは病み疲れた妻リツ子であった。そのリツ子に向かって檀はこう語る。

「癒る。何でもないぞ。秋迄に熱を取る。正月迄に起き上る。三年目には一緒に泳ごうよ。いいか、リツ子。俺は支那からね。いのちの火を持って帰ったぞ、それをやる。おまえにもやる。太郎にもやる。素晴らしいぞ、そのいのちの火は。おまえの病気なぞ、病気のうちに入らんね」

戦場から帰国した檀が、病む妻リツ子に向かって、「いのちの火」をやるうと言う場面であるが、ここでいう「いのちの火」とは一体いかなるものなのであろうか。はたして、檀は死を内在化しえないまま、具体的に「いのちの火」を妻に示しえるのであろうか。さらに続けて、檀は次のように述べている。

なるほど、遠い旅先の果では或日は妻子のことも忘れていた。とめどなく歩きとめどなく夢想し、動員の波及の行衛に吞

まれていた。たったひとつ、まぎれもなく持ち帰れたのは自分の五体にともる、いのちである。

天が下、理想の高下はあるであろう。が、あらゆる分別や思想がもし出ず、禍いについては、見たところである。今は、たった一つの自愛を確立しなかった。鍵治し、覚醒して、天意こたに対え得るほどの自愛の心を確立しなかった。

「自分の五体にともる、いのち」「天意に対え得るほどの自愛の心」といながらも、その内実は分明ではない。ただ、「あらゆる分別や思想がもし出ず、禍い」と、いい、檀が、様々な「禍い」の中で唯一のよりどころとして、「自愛の心」「自分の五体にともる、いのち」を求めようとしているのは確かであろう。それはいわば、戦争という極限状況の下で、最終的に基盤となるのは、自分の「いのち」しかないという覚悟であろう。しかし、「いのち」そのものを脅かされているリツ子にとっては、そのような檀の覚悟が、意味を持ち得るのであろうか。檀が「五体にともる、いのち」を持ち帰ったといっても、結核に冒されたリツ子には、いまその「いのち」そのものが不確かなものでしかないのである。

そして、そのような檀とリツ子との間のズレが顕在化するのには「リツ子・その愛六」においてである。作者としての檀は、この章に「生者の側」（「思潮」昭和二十四年一月号）と題して、次のように記している。

病気の生理が理解出来ないばかりか、それと理解しようとなない一面が、私の中に、たしかにあった。その不安と焦燥を、リツ子はいちいち私に洩らそうと努めるのだが、それを私は、自制心の足らぬ、他愛のない女の媚びだというふうに思っていたが

る。少くも、弱者の側に立っての静かな同情に乏しいのである。

私は爽やかに振舞っていて、得難いほどの健康を保持してきた。いや大胆に生命をたのしみつつ、大過のない体力を育成した。それが私のみに与えられた天与の恩恵だった、ということに気づかないのである。誰でもが、それを享受しているのだというふうに思いこんでいた。

この言葉はこの作品を執筆した時点での檀の実感だと見做してさしつかえないであろう。彼は多くのエッセイの中で、自分の体力や健康について言及しているが、ひとつには、幼少期の環境に負うところが大きいと思われる。檀の母親は大正十年、彼が九歳の折、夫との不仲やある医学生との恋愛事件が原因で出奔している。檀はその後、足利の山寺で父と暮した時期を回想して、「私はこの寺に移り住んでから一個の神仙であったと答えていいかもわからない。〆中略〆殊に妹達が九州に預けられてからは、一人、夜昼の区別もなく両崖山の尾根を走り歩いた」と述べている。このように母と切り離されて、世俗の人情から切り離された「神仙」としての幼少期を送ったということが、檀の人間形成に大きな影響を与えたということには想像に難くない。さらに、青年期における太宰治等との、「お互いの悪徳を助長」する^(註7)ような飲酒放蕩の日々がある。それらが相俟って体力への過信と「弱者の側に立」ちえないという彼の性格の一面となったのである。

とまれ、檀とリツ子との二人の間の溝は彼の意識の上において決定的である。三島由起夫は、「リツ子は宿命によつて死なず、作者の意欲の具現によつて死ぬ。彼女の死は、いはばひたすらに希はれ

てゐる」と指摘している^(註8)。しかし、現実の生活の上では、リツ子と太郎の生活は全て檀の双肩にかかっているものであり、「疑いもなく、私はリツ子の快癒を祈っていた」というのも、また真実であろう。だが、このような状況の中で間違ひなくリツ子の病勢は進んでゆく。檀の心の中にリツ子の死がはつきりと浮んでくるのは、母の疎開先にも居づらくなり、唐泊か西の浦へ移ろうとする時である。

それに唐泊や西の浦は何か因縁の地にも思えてくる。そんな適当の家があれば、いつて見たい気持ちもあった。然し、ふっと暗い予感もした。部屋借りしかないとすると、病人を連れこんで、それを黙過する、田舎の家があるだろうか。それに自分の身辺が、旅人の悲痛な生涯と、次第に酷似してきたことに気がついた。リツ子を失うならば――。

リツ子の病勢は進行していく。いわば、檀の極く身近な問題として死がやってくるわけである。そうした死の足音は、まず、松崎へ移った日のリツ子の血痰として姿を現していたが、「私は正しい自然との連繋のなかで、魚鳥を撃ち、薪を切るといった仕事に熱中していないと、何かしら見えない焦燥とといったものに足許をはらわれる」という檀が炭焼きに熱中している日に再発する血痰として、再び姿を表わし、さらに、檀の誕生日の祝いの餅や赤飯や鯛を食べた翌日からの下痢となって現われる。決定的に死が眼前に姿を見せるのは、黒田博士からの「このままの状態ですと一ト月越すか越せないか」という宣告である。が、この部分は「リツ子、その死」のなかで、作者檀一雄が「故意に事実と相違したことを書いた」として、修正され唐泊のS医師の宣告であったということになる。あきらかにこの部分は作品の構成上の失敗であると思われるが、ここで

はリツ子の命が、一か月というはつきりとした時間として、檀に意識されるようになったということを確認するにとどめておきたい。

(三)

檀は、中国戦線での数多くの死者に対して、先に述べたように「正しい自然への連繋に帰ってゆく」と感じ、「正しい正の誘導の緒口」にしようと努めた。それは、いわば、自分だけは人生者の側Vへ置こうという、エゴイズムとも通じるものであった。また、自分の死に対しても現実感を持ちえなかった。それは、檀の体力と健康への過信からくるものであり、さらに付け加えれば想像力の不足から来るものでもあったろう。それゆえ、病気の妻リツ子との間に意識のズレが生じるという結果を生んだ。しかし、妻の死が現実のものとして迫ってきた時に、檀は中国戦線の死者たちと同様に妻の死をも見做すことができたのであろうか。たしかに檀は、博多へ医師を迎えに行く船の中で「三十日か、有難い」と思う。しかし、それに続けて、「例の冒瀆の魔性の声が湧き上る。己の悲哀を嘲笑うのである。新しい生涯を次々と招きよせる例の軽薄好奇の不常心だ」と反省するのである。そして、「それにしてもこんな船の中にリツ子と二人乗っていたことがありはしなかったか?」と、やはり、思いはリツ子のもとへ帰ってゆくのである。

こうした例でもわかるように檀の心は、リツ子への哀惜の念と、リツ子を人生者の側Vへ追いやるうとする思いの間を揺れ動く。しかもその揺れは突発的である。結核に冒されたリツ子と幼い太郎を抱えた生活は、「全く囚人を越える労働だった。夜が殆ど眠れな

い。太郎が二三度、リツ子が四五度の用便を足してやらねばならぬ」。「生活というものは何と喰べることばかりだったろう。何と糞尿にまみれはてたことばかりだったろう」というような生活である。そのような生活の中で檀の心は揺れ動いていく。そうしたなかで意味を持つてくるのが静子という女性であろう。静子は、リツ子の遠縁の娘として、また、健康で生命力に充ちた女性として、登場する。静子のモデルについては、檀の後の回想もあるが、註作品中の静子に絞って論を進めると、初対面の時、檀は静子に対して「これが、生命だ。何という単純な充実だろう」と、「見覚えのない幸福を感じる。そして、最初に恋愛感情を自覚するのは、太郎を静子にあずけ、博多で美代福というリツ子に似ている芸者と酒を飲んでいる夜である。その時、檀は「すると、あああの生命だ、俺がさぐりとりたいたいの、と唐突な渇くような静子への恋情を自覚」する。この時も檀が静子に見ているのは「生命」である。つまり、静子は、檀によって、死んでゆこうとしているリツ子とは対極の側に位置する女性として、とらえられているのであり、いわば、檀と同じ人生者の側Vに位置しえる女性として、とらえられている。そして、それゆえに「静子への恋情を自覚」するのである。

しかし、檀は、リツ子を、一途に人生者の側Vの人間として遠ざけ、静子を追い求めているのではない。たとえば次のような場面がある。

私はタオルを菜罐のお湯で濡らしリツ子の手を拭いてやっ
た。拭い上げた手指の股を思わずしっかりと握りしめながらし
ばらく私も手放しかねるのである。じっとリツ子も私の顔を見
上げている。気持が押さえきれなかった。それでリツ子の唇に

私の唇をすっかり重ねていった。拒まないものである。リツ子の唇が微かにゆれていようだった。

「太郎。ハハ大事大事ね。死んではいけないね」

このように檀には、また死にゆこうとするリツ子を哀惜する気持ちもあり、それは美しく結晶している。河上徹太郎は、この物語を「稀代な、美しい愛妻物語」といい、「ただひたすら人のいのちの温かさをほのぼのと感じさせるだけだ」と述べている。檀のこのような揺れの一面に注目すれば、これも言えようが、そればかりではないのは、先に述べたとおりである。

こうして揺れ動いていく心の中で、檀は死についてこう述べている。

リツ子は死ぬ。二三日中に。これは確実だ。煙になる。亡びる。消えてゆく。が、死とは何だ。どうとりつくろうても、分明的な現実の感銘に近よらない。相変らず、波頭の不吉な幻覚ばかりが、頭をしびらすほどの、恐怖の形で襲い寄るばかりである。

リツ子が危篤となり、「二三日中に」死ぬと分かっても、なおも「明かな現実の感銘に近寄らない」と述べている。ここでも檀にとって死は、中国戦線の時と同じように、現実のものとはなりえていないかのようである。しかし、死はついに現実のものとなって檀の眼前に現れる。激しい雷鳴の中でリツ子は「ウォーウォー」とこの世に無いような恐ろしい声を挙げはじめたのである。結核菌に脳を冒されて、断末魔の叫びをリツ子は挙げ始める。檀は「一緒に奈落の底へさらわれそうな恐怖」を感じる。いままでも現実のものとなりえなかった死の「恐怖」が、はじめて、現実のものとなるのである。

る。そして、そのような発作が、一段落した時、檀はこう考える。

もう妄念も何も消え失せた。確実な生死の抑揚を心の中にしかりと畳みこむ心地である。仮りに私の齢があるならば、よし、この二十年を正確に生きてみよう、謙虚にそう思って頭を上げた。

ここで、檀は中国戦線で、死を「生の誘導の緒口」としようとしたのと同じように、「死の抑揚を心の中にしかりと畳みこむ」ことにより、「正確に生きてみよう」と決意している。ただ、中国戦線においては、その死が檀にとって、切実な現実感を伴わない死であったために、「死の現実の相」は何ら内在化されえなかった。それゆえ、死を基盤にすることに、檀が獲得したという「いのちの火」も、また分明的なものとはなりえなかった。だが、ここにいる「死の抑揚」とは、そうではない筈である。リツ子の余命が、あと一か月であるというS医師の宣告以来の檀の葛藤は先に述べてきたとおりでである。それらは現実の死のもたらす一側面に他ならなかったであろう。檀は、それらを経験し、妻はいま、死んでゆくとしているのである。たとえば、檀は中国では戦場にありながら、自分の死というものが、切実なものとして想像されなかった。しかし、妻の死を前にして、檀は、はじめて、「遅かれ早かれ、この俺も死ぬだろう。確実に。自分の断末魔の妄想が、しばらく私の頭の中にこびりつく」と、自分の「断末魔」の姿さえ想像している。それはそれだけ死というものが、檀にとって内在化されたからに他ならないであろう。そして、そういういわば内在化された死を「死の抑揚」として、「心の中にしかりと畳みこむ」というのである。

檀は、妻リツ子の死をもって、はじめて、死を内在化された問題

としえた。そうであるならば、ここで檀が、「この二十年を正確に生きてみよう」と、謙虚にそう思いうのは、おのずから、死を内在化しえなかった中国戦線での決意とは異なったものとなりえるであろう。少なくとも、檀が「謙虚にそう思いう限り、リツ子の死は、檀の新たな死への一つの契機となりえたのである。

最終章、静子への求婚を断われ、檀が太郎と二人で、リツ子の骨を抱いて「長い砂立の一本道」を歩いていく姿は象徴的ですからある。ただ、檀はいま、その道の端にいたばかりである。その道を歩き続けることができるのかどうかは、今後の檀の問題として残されているといえよう。

註

- 1 「風土と揺れる心情と」（「問題小説」昭和四十八年十月号）
- 2 「詩人と死」（「午前」昭和二十一年八月号、九月号）
- 3 「無名者にとつての修羅」（昭和五十一年二月、小川和佑編、社会思想社）収録。解説も小川和佑
- 4 註2に同じ。
- 5 「わが顛落」（「新潮」昭和三十三年六月号）等に詳しい。
- 6 「じじはばの花」（「えきすおれす日本通運」昭和三十九年四月十四日号）
- 7 「小説太宰治」（「新潮」昭和二十四年七月号、八月号）
- 8 「檀一雄の悲哀」（「文学界」昭和二十六年三月号）
- 9 「リツ子、その愛その死」の静子」（「週刊サンケイ」昭和三十八年四月二十二日号）によれば、静子の最大のモデルはヨッ子夫人であり、それに二人の女性のイメージを重ね合わせたという。
- 10 「檀一雄論」（新選現代日本文学全集26「檀一雄集」昭和三十五年十二月、筑摩書房、解説）

（附記、檀一雄本文は新潮社版「檀一雄全集」によった。）